

大阪大学人間科学部

私たちの本質探る実験



白井伸之介教授(左から2人目)の指導で、模型を組み立てながら数字の音を聞き分ける実験に取り組む学生ら(大阪府吹田市) 伊東広路撮影

心理学など駆使

人間とは何か。どんな本質があり、どのように社会を作り上げているのか。一見、つかみどころのない名前の人間科学部だが、誰もが抱く人間に対する疑問を、心理学や社会学など様々な角度から探求できる幅の広さがある。

熱中講義

「科学」を掲げているだけに、授業ではユニークな実験を行うことも多い。

白井伸之介教授(58)(安全行動学)のゼミでは、木製の手押し車の部品を、学生が完成図を見ながら組み立てる。作業中、「ゼロ(0)」「いち(1)」などつけた数字の音声を2秒間隔でスピーカーから流し、「3」と「8」が流れた時だけ、「はい」と返事する約束だ。

最初はスムーズでも、組み立てが複雑な箇所では、返事をし忘れたり、逆に音声に気をとられて組み立て方を間違えたりする。二つ

のことを同時に行う「二重課題」に関する実験。人間の注意力には限界があり、異なる作業が重なること、ミスをしやすくなることを学ぶのが狙いだ。

授業のフィールドは学内だけではない。鉄道会社や消防学校など安全に密接に関わる機関を訪れたり信号のない横断歩道の手前で何台くらいの自動車がいつ

問題意識育つ場

心理学や社会学のほか、学べる分野は哲学、生物学、教育文化、国際協力など枚挙にいとまがない。学生は2年生後半から各分野のゼミに所属し、10人ほどの少人数教育を受けるが、それまでどの分野を志望するかをじっくり考える。

たん停止するかを観察したりして、卒業論文などのヒントを得る。白井教授は「なぜ人間はミスをするのか」を学ぶことで、交通事故や労働災害の防止など実社会に役立つ知識が身につくと意義を語る。

扱う分野の幅広さから、何を学ぶか迷ってしまう学生も多いというが、「その分、自分の関心がどこにあるかを学生が真剣に考えられる」と学部OBでもある白井教授は強調する。柔軟で総合的な学びの場は、問題意識を持つ人材育成につながっている。(諏訪智史)

学生の声

3年の福沢真樹さん(21)「最初はやりたいうことが漠然としていたが、勉強しながらじっくり考えられた。オートバイの事故をどうやって防げるのかを研究したい」

4年の飯尾健太郎さん(21)「授業は実験計画の立案やデータ分析などの地道な作業も多い。思った以上に大変だが、仮説を立てて検証するプロセスを学べたことは、社会に出て役立つと思う」

4年の松原真弓さん(21)「幅広い分野を学んだ後、先輩のアドバイスを受けながら専攻を決めることができた。大学院で記憶に関する研究を続けたい」